2－B－4
母指 MP 関節尺側側副靱帯完全断裂における保存療法の 1 例

平野　蓮、瀧下晃洋、立木北斗、五箇隼人、吉澤遼馬、井上雄喜、鄭　仙希、三厨有紗、田島祥吾、野口昌宏、河岸誠司（野島整形外科内科）

key words：母指 MP 関節、尺側側副靱帯損傷、Stener 損傷、超音波評価、保存療法

【目的】母指 MP 関節尺側側副靱帯（以下 UCL）完全断裂では、Stener 損傷や著明な骨片転位を伴う場合は手術適応とされるが、これらを認めない例では保存療法も選択される。今回、超音波画像観察（以下 US）で Stener 損傷を除外し、理学所見を踏まえた保存療法で良好な経過を得た 1 例を報告する。【対象】48 歳男性。キックボードで転倒受傷し翌日受診した。右母指 MP 関節周囲の腫脹、UCL 中手骨側の圧痛、外反ストレステストで endpoint 消失を認めた。X 線画所見では骨片を認めず、ストレス撮影で患側 48°（健側 13°）と UCL 完全断裂を認めた。US で Stener 損傷を認めず保存療法を選択した。【結果】初診時より MP 関節軽度屈曲位でサムスパイカ固定を施行した。外反角度は受傷 2 週で 29°、3 週で 14° と改善を認め、着脱式固定へ変更した。8 週でサポーターへ移行し良好に治癒した。【考察】Heyman らの基準で本症例は完全断裂に該当した。外反 48° の動揺性を認めたが、X 線画像検査にて著名な骨片転位を認めなかったこと、US で Stener 損傷を除外できたため保存療法を選択し、動揺性改善と靭帯の連続性再獲得を認めた。完全断裂に対する保存療法では画像のみの評価を過信するのではなく、丁寧な理学所見の観察を継続して行い、継時的に評価することが不可欠である。また、不安定性が残存・増悪した際には速やかに手術へ移行できる体制を整えておくことが重要であり不可欠と考えられた。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本報告は症例報告であり倫理審査の対象外である。個人情報保護に十分配慮し、対象者より学会発表の同意を得た。

2－B－5
治療条件の異なる腱性マレットフィンガー 2 症例の比較検討―DIP 関節変形性関節症を合併した陳旧例に着目して―

田中康博、石川貴之、小笠原里佳、大山美華（帝京短期大学）

key words：腱性マレットフィンガー、陳旧性、変形性関節症

【目的】腱性マレットフィンガーは終末伸筋腱損傷により DIP 関節伸展障害を呈する外傷であり、保存療法では DIP 関節を完全伸展位または軽度過伸展位で 6～8 週間固定することが推奨されている。しかし、受傷後時間が経過した陳旧例や DIP 関節変形性関節症（以下 DIP 関節 OA）を合併した症例では過伸展位の獲得が困難な場合がある。今回、治療条件の異なる腱性マレットフィンガー 2 症例を経験したため比較検討した。【対象】症例①は 61 歳男性、受傷 2 日後に来院した新鮮例で、筒状固定により DIP 関節過伸展位で固定した。症例②は 57 歳男性、受傷後約 1 か月で来院した陳旧例で、DIP 関節 OA を合併し過伸展位固定が困難であったため、0° 伸展位で固定した。背側皮膚トラブル出現後は背側開放型シャーレ固定へ変更した。両症例における治療成績を比較した。【結果】症例①は最終伸展不全角度 0°、症例②は－5° であり、いずれも ADL 障害や再発を認めず、蟹江らの評価は「優」であった。症例②では皮膚トラブルを認めたが、固定方法を変更することで保存療法を継続できた。【考察】陳旧例および DIP 関節 OA 合併例では過伸展位固定は困難であったが、0° 伸展位を継続して保持することで良好な治療成績が得られた。腱性マレットフィンガーの保存療法では、過伸展位の獲得そのものよりも伸展位保持を継続することが良好な治療成績につながった可能性が示唆された。また、陳旧例や OA 合併例においても、適切な固定方法を選択することで保存療法が有効となる可能性が考えられた。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本報告は通常診療の範囲内で実施した症例報告であるため、倫理審査は不要である。個人情報保護に配慮し、対象者から学会発表について同意を得た。

2－B－6
柔道整復師国家試験における合格者と不合格者の科目別得点差

吉田裕輝[1,2]、園部英貴[1]（[1]日本体育大学医療専門学校、[2]日本体育大学）

key words：柔道整復師国家試験、科目点数、専門学校

【目的】柔道整復師国家試験の合格率は低下傾向にあり、対策が求められている。国家試験は 11 科目で構成され、各科目の問題数は異なる。合格者と不合格者で得点差の大きい科目を明らかにできれば、重点学習により合格率向上が期待できる。高得点者は全科目で得点が高い傾向がある。さらに過去の分析結果から、必修と一般問題の点数の相関は低い。そこで本研究では、必修と一般を区別し、不合格者と高得点者を除いた合格者を比較することで合格に寄与する科目を抽出することを目的とした。【方法】対象は第 28～34 回国家試験を受験し、自己採点結果を提出した A 専門学校卒業生 119 名とした。必修問題の点数を不合格群（40 点未満、n＝13）、合格群（40 以上 45 点未満、n＝58）、高得点合格群（45 点以上、n＝48）の 3 群に分け、一般問題の各科目で群間比較を行った。続いて一般問題の点数を不合格群（120 点未満、n＝10）、合格群（120 以上 140 点未満、n＝52）、高得点合格群（140 点以上、n＝57）の 3 群に分け、同様に群間比較した。さらに必修・一般ともに高得点合格者群を除いた 2 群比較も行った。【結果】必修問題の 3 群比較では、全科目で不合格群と合格群に有意差はなく、高得点合格群を除いた 2 群でも同様であった。一般問題の 3 群比較では病理学のみ不合格群と合格群で有意差が認められた。高得点合格群を除いた 2 群比較では、解剖学、生理学、病理学、一般臨床医学、柔道整復理論の 5 科目で有意差が認められた。【考察・結論】以上より、上記 5 科目が合格に特に重要な科目である可能性が示唆された。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本研究は日本体育大学医療専門学校研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：024-01）。既存データを用い、個人が特定されない形で解析した。必要に応じて情報公開を行った。

2－B－7
多職種連携教育における授業前後の学習評価尺度を用いた検討 -第１報-

野田哲由、田村哲也、関　駿斗（SBC 東京医療大学）

key words：多職種連携教育（IPE）、初年次生向け多職種連携学習評価尺度（UIPLS）

【背景・目的】本学では、2024 年度から多職種連携教育が始まった。3 学科合同授業の授業前後評価を通じて教育効果を省察し、今後の授業内容を検討することを目的とした。【症例】対象は、2025 年度「人間関係実践演習Ⅲ（多職種連携活動論）」を履修した 3 年次理学療法学科 72 名、整復医療・トレーナー学科 60 名、看護学科 91 名の 223 名とした。15 回の授業前後に初年次生向け多職種連携学習評価尺度（UIPLS）及び自由記載アンケートを実施し、前後比較とテキストマイニングを行った。【経過】アンケートの回収率は、受講前が 192/223 名（86.1％）、受講後が 189/223 名（84.8％）で、各学科とも 81.7％以上であった。授業前後の比較では、全体（3 学科）で UIPLS 総得点と 4 つの下位尺度に有意差を認めた。整復医療・トレーナー学科では、総得点と一部の下位尺度で有意差を認め、授業後に高値を示した。【考察】本研究の UIPLS 結果では、多職種連携への理解や態度に肯定的変化が示唆された一方、「グループ活動のリフレクション」など一部項目では全学科で有意差を認めなかった。今後の授業計画を検討する際の課題となりうる。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本研究は SBC 東京医療大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：24-30）。対象者には研究目的・方法・利益相反・個人情報の取扱いを説明し、同意を得た。

2－B－8
柔道整復師養成課程における職業的アイデンティティが学校生活メンタルヘルスに及ぼす影響―4 年間の縦断的調査による検討―

池田　財（宝塚医療大学　保健医療学部　柔道整復学科）

key words：職業的アイデンティティ、職業同一性、学校メンタルヘルス、縦断調査

【目的】柔道整復師を目指す学生の心理的支援や休退学予防には、職業的アイデンティティ形成とメンタルヘルスの関連理解が重要である。先行研究では職業的アイデンティティは学年進行に伴い変化することや健康度の高い学生ほど高いことが報告されている。そこで本研究では、柔道整復学科 1 年生の職業的アイデンティティが 4 年間のメンタルヘルスに及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。【方法】2021～2024 年に年 1 回、計 4 回調査を実施した。全 4 回で回答が得られた本学、柔道整復学科 43 名を分析対象とした。調査項目は、職業同一性尺度、メンタルヘルス尺度とし、職業同一性尺度を独立変数に各学年のメンタルヘルス尺度を従属変数とした重回帰分析を実施した。【結果】職業同一性の「医療職としての自己成長感」がメンタルヘルスの「大学生活の乏しさ」（$\beta=-0.50$）に有意な負の影響を示し、「専門職像の明確さ」（$\beta=0.54$）、「医療職集団の中での対他的同一性」（$\beta=0.33$）は「大学生活の乏しさ」に有意な正の影響を示した（$p<0.05$）。しかし、2～4 年生のメンタルヘルスに対しては有意な影響は認められなかった。【考察】1 年生の「医療職としての自己成長感」は「大学生活の乏しさ」を軽減させる傾向を示した。一方、「専門職像の明確さ」は「大学生活の乏しさ」を高めた。これは、理想的な柔道整復師像が明確化されていることで「理想と現実のギャップ」を感じた可能性が示唆された。しかし、これらの影響が 2 年生以降に持続しなかったことから、高学年のストレッサーに対しては 1 年生の意識形成のみでは不十分であることが示唆された。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本研究は宝塚医療大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：2106171-1）。対象者には研究目的・方法・利益相反・個人情報の取扱いを説明し、同意を得た。

2－B－9
柔道整復師養成施設学生の学修意欲の経時的変化の調査：柔道整復師資格取得のモチベーション向上を目的として

佐藤裕二[1,2]、伊藤　譲[3,4,5]、田宮慎二[1]、樽本修和[1]、大石有希子[1]、祁答院隼人[2,3]、杉澤　舜[2,4]（[1]帝京平成大学ヒューマンケア学部柔道整復学科、[2]日本体育大学大学院保健医療学研究科、[3]日本体育大学医療専門学校、[4]日本体育大学スポーツキュアセンター横浜・健志台接骨院、[5]日本体育大学保健医療学部整復医療学科）

key words：柔道整復師養成課程、学修意欲、無気力感、資格取得意欲、縦断研究

【背景・目的】柔道整復師養成課程では、多領域の専門知識と実技を継続して学ぶため、学修意欲の維持が重要である。しかし、学修意欲低下や無気力感の経時的変化と資格取得意欲との関連は十分に検討されていない。本研究は、学修意欲低下および無気力感の経時的変化を明らかにし、資格取得意欲に関連する要因を検討することを目的とした。【方法】Web アンケートを用いた縦断的観察研究である。A 大学の柔道整復師養成課程 1～4 年生を対象に、2024 年 9～12 月の 4 時点で得られた 358 名分、延べ 788 観測を解析した。学修意欲低下および無気力感に関する 6 つの下位尺度について、学生番号をランダム切片とする混合効果モデルで検討した。さらに、12 月時点の 134 名を対象に、資格取得意欲を目的変数とする順序ロジスティック回帰分析を行った。【結果】授業意欲低下は 9 月より 11 月および 12 月で有意に高かった。大学意欲低下は 3 年生が 1 年生より、他者不信･不満足は 2 年生が 1 年生より、疲労感は 4 年生が 1 年生より有意に高かった。自己不明瞭では、学年、月および学年×月の交互作用が有意であった。資格取得意欲には、学業意欲低下、他者不信・不満足、疲労感および学年が有意に関連し、2 年生は 1 年生および 3 年生より資格取得意欲が低い方向に関連した。【考察】学修意欲低下および無気力感の一部は、時期や学年によって異なることが示された。資格取得意欲の維持には、学修面、対人面および生活状況を含む学年に応じた支援が必要と考えられた。ただし、資格取得意欲との関連は 12 月時点の横断解析に基づくため、因果関係については慎重な解釈を要する。

2－B－10
柔道整復師養成課程学生の健康度・生活習慣およびストレス反応の学年別特徴
大石有希子、大圖貴三（帝京平成大学　ヒューマンケア学部　柔道整復学科）

key words：柔道整復師養成課程、生活習慣、健康度、ストレス反応、学年比較

【目的】われわれはこれまで、柔道整復師養成施設の最高学年では望ましくない生活習慣を送る学生が多く、生活習慣が心身の健康度に関連することを報告してきた。しかし、養成施設における学年別の特徴は明らかでない。本研究では、柔道整復師養成課程の大学生における健康度・生活習慣およびストレス反応の学年別特徴と各因子間の関連を検討した。【方法】横断研究として、大学 1〜4 年生 356 名（男性 256 名、女性 100 名、平均年齢 19.81±1.91 歳）を対象とした。健康度・生活習慣は DIHAL.2、ストレス反応は SRS-18 で評価した。各得点は等分散性に応じて一元配置分散分析または Welch 検定により学年間で比較し、多重比較を行った。また、各因子間の関連を Spearman の順位相関係数により検討した。【結果】DIHAL.2 の生活習慣は学年間に有意差を認め（p＝.005）、1 年生は 4 年生より有意に高値を示した（p＝.008）。また、運動や休養にも学年差を認めた。SRS-18 の抑うつ・不安にも学年差を認め（p＝.016）、4 年生は 1 年生より有意に高値を示した（p＝.019）。ストレス回避は抑うつ・不安（$\rho = -.414$）、不機嫌・怒り（$\rho = -.385$）、無気力（$\rho = -.397$）と有意な負の相関を認めた（いずれも $p < .001$）。【考察】学年によって生活習慣およびストレス反応に差を認めた。4 年生は 1 年生より生活習慣得点が低く、抑うつ・不安が高いことから、早期から生活習慣およびストレス反応を継続的に把握する必要がある。また、学年に応じて生活習慣の把握とストレス対処を支援することが重要である。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本研究は帝京平成大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：2025-146）。対象者には研究目的・方法・利益相反・個人情報の取扱いを説明し、同意を得た。

2－B－11
個人の成長プロセスに寄り添う学習支援方法の構築―1 年時成績と Big Five・Grit の全学年横断比較および縦断的展望から―
渡邊杏夢、坪島功幸、剱持佑起、東　文博、赤堀宏紀、髙橋　樹、渡邊茉乃果、星　秀夫（帝京大学）

key words：個人の成長プロセス、寄り添う学習支援、Grit（やり抜く力）、Big Five、初年次教育

【背景】前年度調査で柔道整復学科生は学年進行に伴い外発的から内発的動機付けへ移行することが示唆された。一人ひとりに寄り添う指導や成績不振者の早期検出に向け、動機変容に関与する心理要因として性格特性（Big Five）およびやり抜く力（Grit）に着目した。【目的】全学年の Big Five・Grit の横断比較と 1 年生の成績との関連を解明し、個人の縦断的変容を踏まえた要支援者の早期検出および寄り添う学習支援方法を探索する。【方法】研究デザインは観察研究（横断・縦断的検討）とした。対象は柔道整復学科全学年とし、Big Five および Grit を評価した。1 年生は面談時のルーブリック評価、座学（解剖・生理・LD）・実技・平均成績を取得した。学年間の横断比較、相関分析（Spearman）、同一コホートの縦断的変容追跡を行った。【結果】1 年生でルーブリック評価と各成績に有意な相関は認められなかった。Big Five では勤勉性と解剖学成績の間に弱い正の相関を認めたのみで（$\rho = 0.214$、$p = 0.038$）、他成績とは無相関であった。一方、全学年比較および縦断追跡において学年進行に伴い Grit 等が高まる傾向が認められた。【考察】1 年時の成績と性格特性はほぼ無相関であり、表面上の性格や自己評価のみで潜伏する要支援者を見抜くことは困難であった。先入観を排し、Grit 等の成長プロセスを捉えながら低学年からの丁寧な行動支援により寄り添い、すくいあげる学習支援の構築が重要である。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本研究は帝京大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：帝理倫 25-009 号-1）。対象者には研究目的・方法・利益相反・個人情報の取扱いを説明し、同意を得た。

2－B－12
柔道整復学科学生が抱える学業・学生生活上の負担の学年別特徴 ―自由記述のテキストマイニングによる探索的検討―
大圖貴三、大石有希子（帝京平成大学　ヒューマンケア学部　柔道整復学科）

key words：柔道整復師養成教育、学生、ストレス、テキストマイニング、学生支援

【背景・目的】柔道整復師養成課程では、専門基礎科目の学習、実習、各種試験、国家試験対策など、学年に応じて直面する課題が異なる。しかし、学生が学業や学生生活で感じる負担を自由記述から捉え、学年別に検討した報告は少ない。本研究は、柔道整復学科学生の自由記述をテキストマイニングにより解析し、学業・学生生活上の負担の学年別特徴を明らかにすることを目的とした。【方法】帝京平成大学ヒューマンケア学部柔道整復学科の 1〜4 年生を対象にアンケート調査を実施した。学業、国家試験、臨床実習および学生生活における負担や課題について得られた自由記述を統合し、株式会社ユーザーローカルの AI テキストマイニングを用いて解析した。誤記・表記揺れを統一後、学年別に頻出語を抽出し、ワードクラウドおよび共起ネットワークを作成した。【結果】「勉強」「授業」は全学年で共通してみられた。一方、1 年生では「覚える」「大変」「単語」「生理学」、2 年生では「アルバイト」「両立」「実習」、3 年生では「実技試験」「実習」「評価」、4 年生では「不安」「国家試験」「合格」「就活」が特徴的であった。共起ネットワークでは、2 年生で「アルバイト―両立」、3 年生で「実技試験―評価」、4 年生で「不安―合格―国家試験」などの関連が認められた。【考察】学業に関する負担は全学年に共通する一方、その内容には学年別の特徴がみられた。1 年生では専門教育への適応、2 年生では学業と生活の両立、3 年生では実践的教育と評価への対応、4 年生では国家試験・進路への心理的負担が反映された可能性がある。以上から、学年ごとの課題に沿った学生支援の必要性が示唆された。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本研究は帝京平成大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：2025-146）。対象者には研究目的・方法・利益相反・個人情報の取扱いを説明し、同意を得た。

2－B－13
柔道整復ガイドライン（慢性化疾患と慢性状態の診療指針）

伊藤　篤（鶴亀整骨院）

key words：不完全治癒疾患、疾患の慢性化、慢性状態、不可逆的、進行性

【目的】昨年の当学術大会にて発表した治癒基準の中で、不完全（臨床的）治癒疾患の取扱は慢性化疾患に対する診療ガイドラインが別途必要と述べた。そのため今回はその部分についての発表をする。【方法】長野県柔道整復師会で考え纏めた柔道整復ガイドライン総論より慢性化と慢性状態について抜粋した。【結果】1．取扱疾患の予後と慢性化 2．慢性化疾患あるいは慢性状態とは 3．慢性化疾患診療ガイドラインの必要性 4．取扱疾患の組織別にみる完全治癒や不完全治癒との関連性 5．慢性化疾患に対する診療指針 6．慢性状態に対する治療指針の 6 項目に分類した。【考察】「慢性化」とは、不完全（臨床的）治癒疾患の中で、損傷や炎症が繰り返されることにより運動器の構造と機能が進行的に低下し、それが後天性素因（内因）となって機械的要因に対する抵抗性が弱まり再び損傷や炎症が繰り返される状態と考える。「慢性状態」とは、慢性化した状態が更に進み、最終的に症状が間断なく出現する状態で不可逆的と考える。また慢性状態に移行しやすい疾患を「慢性化疾患」と考える。「慢性化疾患に対する診療指針」繰り返される関節への軽微な損傷や炎症は慢性化の原因となるため、病因となる機械的要因（行為や動作、行動）を突き止め、病因に対し治療や指導管理を行なう。「慢性状態に対する治療指針」疾患が慢性状態となり保存的治療に抵抗し症状の改善が見られない場合には、外科的に解剖学的な構造の改善が必要な場合があり、患者の理解を得て医師へ診療を依頼する。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本研究に関する研究倫理委員会（倫理審査委員会）を設置する所属機関がなく、委員会審査を受けることができない。研究はヘルシンキ宣言に準拠し、対象者の権利保護、個人情報の保護、不利益の回避に十分配慮して実施した。対象者には研究目的・方法・個人情報の取扱いを説明し、同意を得た。

2－B－14
熟達柔道整復師の臨床における「修羅場の経験」が形成する実践知の構造

稲川郁子（日本体育大学）

key words：柔道整復師、熟達柔道整復師、修羅場の経験、暗黙知、実践知

【目的】本研究は、熟達柔道整復師の臨床実践において不可避的に遭遇する「修羅場の経験」に着目し、その経験の語りが形成する実践知の構造を、アーカイブ化することを目的とした。【対象・方法】熟達柔道整復師 6 名と関係者を対象とし、ヒアリングと資料照会に基づく質的分析を行った。【結果】本研究においては、臨床上の危機的状況を意味する「修羅場」が熟達柔道整復師の英知形成に不可欠であることを理論的に提示した。肩関節脱臼の整復難渋例に関する語りの分析を通じて、失敗や難渋の経験が専門職アイデンティティの再構築と、臨床判断の深化に寄与する事実を指摘した。また、小児肘関節部骨折の重症例を対象とし、熟達者が直面する保存療法の適用に関する倫理的葛藤と、「状況との対話」としての実践知の存在を抽出した。さらに、関節窩下脱臼や頸椎脱臼等の希少症例に関する語りから、公式な症例報告に顕現しにくい非定型的な実践知の存在を明らかにし、柔道整復師の職域を多角的に捉え直す新たな視座を提示した。【考察】これらの縦断的分析により、「修羅場」の経験が単なる技術的熟練を超え、複雑かつ不確実な状況下における専門職としての認知、判断、倫理的実践を統合する多層的な実践知を形成することを示した。特に、熟達者が語る「一回起性の高い経験」は、形式知化されにくい身体知や暗黙知の宝庫であり、これらをアーカイブし次世代に継承することは、専門職教育の質の向上および柔道整復師の社会的再評価に不可欠である。本発表では、本研究で蓄積された知見に基づき、熟達柔道整復師の実践知の構成原理と、その英知伝承に関する総括的考察を行う。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本研究は日本体育大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：022-H004）。対象者には研究目的・方法・利益相反・個人情報の取扱いを説明し、同意を得た。

2－B－15
臨床実習デイリーノートの評価に用いたルーブリックの検討―観点別評点分布に基づく予備的分析―

伊藤　譲[1)]、祁答院隼人[2)]、武井佑太[1)]、杉澤　舜[1)]（[1)]日本体育大学、[2)]日本体育大学医療専門学校）

key words：臨床実習、デイリーノート、ルーブリック、省察、教育評価

【目的】臨床実習での学びや省察を記述するデイリーノートに対し、評価観点と段階別の判定基準を示したルーブリックを作成し、使用してきた。本研究は、評価基準としての適切性を検討する第一段階として、観点別評点の分布を明らかにすることを目的とした。【方法】既報の教育実践データを用いた後方視的二次解析である。2025 年度の A 大学柔道整復師養成課程 3 年生 93 名のうち、4 日分の本文・記録日・評点を照合できた 83 名 332 件を対象とした。10 名は学生単位で除外した。選択基準は照合後に設定した。ルーブリックはシラバスに基づき人工知能（Artificial Intelligence：AI）の支援により作成し、担当教員が確認した 5 観点 3 段階である。生成 AI による保存評点（1～3 点）の度数・割合、4 記録すべてが最高評点となる学生数、合計素点の分布を集計した。換算点は用いず、再採点・欠測補完は行わなかった。【結果】3 点の割合は「学びの具体性」88.3%、「振り返りの深さ」46.7%、「臨床現場との関連性」92.5%、「自身の成長への気づき」59.6%、「今後への展望・活用意欲」76.5%であった。「臨床現場との関連性」は 66 名（79.5%）で 4 記録すべてが 3 点であり、合計素点 15 点の記録は 136 件（41.0%）であった。【考察】一部の観点に最高評点への集中を認めたが、記述内容、判定基準、AI の採点傾向の影響は区別できない。対象者の選択による偏りにも留意を要する。適切性の判断には、本文中の評価根拠と判定基準の対応を教員の独立評価で確認する必要がある。【COI】開示すべき利益相反はない。【倫理的配慮】本研究は日本体育大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：025-H167）。対象者には研究目的・方法・利益相反・個人情報の取扱いを説明し、同意を得た。